

私たちは何かに目が向いているとき、本当に大切な物は何を見失っていることが多々あります。そこに行く目的を見失わないで生きていますか。子供たちに何かをさせるのであれば、なぜそれをさせるのかがわかっていますか。私たちは親の目的を知らなければならないし、その目的を見出そうとしなければなりません。私たちはどこに本当の問題があって、何からの外的を外しているのかをきちんと理解しなければなりません。

■ I まとめ&新しいテーマ (13～14節)

① まとめ (13節) 「ですからわたしたちは、もはや互いにさばきあうことのないようにしましょう。」

裁きあうこと自体がナンセンスなのです。なぜ裁くのでしょうか。それは、自分が裁判官になっているからです。聖書に「義人はいない。ひとりもない。」と書いてあるとおり、全ての人が心の中で悪をたくらみ、人生の中で悪を行ったことのない人はひとりもないのです。一人一人に役割があり、それに対する秩序を与えただけなのです。誰が偉いとか、誰が上で誰が下とかではなく、全てに役割があるのです。相手が誰であれ、人に対して後ろ指をさせるような人はひとりもないのです。では、それに対して聖書はどうすればよいと言っているのでしょうか。

② 新しいテーマ (13節) 「いや、それ以上に兄弟にとって妨げとなるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。」

「つまずきになるものを置くな」と聖書は言っています。こう言うと、「つまずかせる人が悪い」と言う人がいますが、これは第三者に言っているのではなく、「あなた」に言っているのです。なぜ私たちがつまずくのかというと、「恐れ」があるからです。「恐れ」は必ず「死」に向かっています。例えば孤独。なぜ孤独が恐いのか。それは、誰にも頼れず、助けてもらえないからです。その、助けてもらえない果てには「死」があるのです。私たちが不安を感じる最終目的地はいつも「死」なのです。だから人から愛されないのが孤独で不安だし、不安の先には「死」が待っているのです。私たちが「死」の恐れゆえにルールを作って何かをしようとするのです。私たちは恐れるから自分を正しいという存在に持ち上げたくなるのです。クリスチャンがいぼんしてはならないのは、不安から来る恐れです。これは、不信仰ということです。しかし、聖書はこう言っています。「しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは罪です。」(23節)

この信仰と言う言葉は「確信」ということです。だから、確信なく行っていることは罪だと聖書は言っているのです。

■ II 愛の律法 (15～19節)

私たちがもしそれぞれの認識の違いによって、その人の信仰を失わせるようなことがあるなら、それは忌まわしいことです。私たちは今までやってきたその家のルールをあなたも聖書のルールであるかのようにやっているのです。このローマ書で伝えたいことは、私たちがルールを決める人ではないということです。そしてそのルールは、それぞれが信仰の自由によって自らが正しいと思えることを行っているいわけです。しかし、その正しいと思っていることが、あなたの確信によるものではなくて、たぶんそうであるだろう、ということで行っているなら大きな問題だし、もしそれが愛でないなら正しいことであっても無駄であると言っています。「愛でない」とは何かということ「自分がそれをされることに腹が立つ」ということです。例えば、誰かにプレゼントをします。ところが相手は「ありがとう」を言いません。「ありがとう」を言わないのは良いことではありません。しかしその人が腹が立つのは、自分にありがとうと言わなかった相手の態度に対してなのです。これが、家庭でも職場でも教会でも問題になっているのではないですか。

与えられている自由には義務があります。愛によって行動するという義務です。「ですからあなたがたが良いとしてしていることがらによって、そしられないようにしなさい。」(16節)

私たちはいつも、自分のためにその行為をしているのかそ

うでないのかを判断しないと、私たちが裁き主になって相手を利用してしまいます。その中で大切なのは、何のために自分は今それを伝えているのか、何のためにそれをやっているのかを私たちは理解しないといけません。これを見失うと人を裁くことになります。なぜかということ、自分が行っていることと相手と比較するからです。聖書は、感じる力で相手を愛せ、と言っています。

■ III クリスマン生活の原則 (20～23節)

確信でない=罪

確信であっても愛でない=罪

自由であっても義務を果たさない=罪

確信とは私たちの良心に与えられた、信じる心に対する確信なのです。縛られている人は弱い人なのだからわかってあげないといけません。これが愛です。

「自分が良いと認めていることによって裁かれない人は幸福です」(22節) 良いと認めていることが本当に正しいのかどうか、気をつけなければいけません。

そして、妥協しないでください。聖書は、後になってわかるのです。聖書が与えるものは知識ではなく知恵です。知恵というものは、納得がいけないこともあるのです。どんな状況になっても諦めないで、確信を持って生きている人には将来があります。これが私たちの信仰です。信仰は、納得とは全く違います。それは、見ずに信じる行為だからです。

■ IV 生き方 クリスマスから (15:1～3)

私たち力ある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。(1節)

私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。(2節)

キリストでさえ、ご自分を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にもふりかかった」と書いてあるとおりです。(3節)

人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。(マルコ 10:45)

15章2節にあるように、私たちが「これを蒔けば必ず成る！」と確信を持って行わなければいけません。イエスキリストは、仕えられるためではなく、仕えるために来られたのです。だから馬小屋に生まれたのです。このことを忘れないでください。イエスキリストは、十字架にかかって死ぬためにこの世に来ました。でもそれよりもっと大切なのは、生まれた場所です。彼は、ただ死ぬために来たのではなく、「わかろう」としたのです。聖書の原点は、神が人を理解しようとしたことです。私たちが本当に人を理解しようとしているのでしょうか。本当に理解して、寄り添っているのでしょうか。あなたは今、何のためにそれをしているのですか。あなたは何のために議論をするのですか。自分の気持ちをわかってもらうためですか。それとも、その人の気持ちを理解しようとして話すのですか。

「あなたを愛しているのか、あなたが愛しているのか」「人を造った神なのか、人が造った神なのか」「あなたのためなのか、相手のためなのか」このように一文字違うだけで、全く本質が変わってきます。これをいつも見極めていなければいけません。間違っても、自分が正しいと思っていけません。そうした瞬間から全てのことが間違っているのです。神さまは、私たちひとりひとりを最高傑作に造られました。私たちは今、元の姿に戻ろうとしています。自分が間違っているかもしれないと思うところから、元に戻ることははじまるのです。

(要約者:秋山 恭子)

(2019年12月15日)